

美しい戦士に惹かれて なかむらきょうこ ～中村香子～

フィールドワークという言葉を知っていますか？ これは、文化人類学・社会学・生物学・地質学などの様々な学問において、研究室の外で行う実地研究のことです。京都大学でも様々な人がこのフィールドワークに従事し、国内だけでなく、アジア、アフリカ、極地などへも向かい、研究を行っています。ここでは、特に海外へ飛び出し世界の民族と触れ合う人の姿に迫ります。実際にアフリカの地で研究を行っているアジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域専攻の院生、中村香子さんにお話を伺ってきました。

(wodaabe)



▲中村香子さんとサンプルの戦士たち

ビーズに秘められた記憶と意味

どんな研究を
されているんですか？

私は東アフリカのケニアでサンプルという民族の社会や文化について研究しています。彼らの社会には年齢体系というものがあり、男性は割礼と結婚によって「少年（誕生～割礼）」と「戦士（割礼～結婚）」、そして「長老（既婚男性）」の3つのグループに分けられているんです。なかでも「戦士」はたくさんのビーズで作られた色鮮やかな装身具を身に付けているんだけど、これが近頃どんどん派手になってきているんです。頭に造花まで付けちゃって、もうファンキーなくらい！ だから、私はこのような身体装飾の変化を手がかりにして彼らの社会について研究を行っているんです。実際にどういった感じで調査を行っているかというと、何人もの「戦士」に協力してもらい、それぞれの装身具が持つ意味や歴史を尋ね、その装身具の形や色、そして使われているビーズの数のデータを採る、とい

うことをしています。ビーズ一粒一粒に歴史や思い出が詰まっているので、一人に3時間ぐらいかかってしまうんですよ。もちろん、これ以外にも彼らの儀礼を観察したりと、いろいろな調査を行っています。



▲頭に造花をつけた戦士たち



戦士って
どんな人達なんですか？

とにかくとても美しい人達。私が彼らについて研究をはじめたのも、とにかくその美しさに一目惚れしちゃってもっと深く知りたいと思ったからなんです。サンプルの社会では、彼らは踊って、恋さえしてれば良いとされています。でも、最近では彼らはそういった暮らしを「無駄だ！」なんて言い出してきているんですよ。これまで彼らのポキャブラリーには「無駄」なんて言葉はなかったのに。戦士は30歳ぐらいまで結婚はできないのですが、最近ではもっと早く結婚して落ち着きたいと思う人が多いようで、社会が近代化していく中で、年齢体系というシステムが揺らいできているのかもしれない。

フィールドでは
どのような生活を？

最長で7ヶ月滞在したことがあります。いつもサンプルの誰かの家に泊めさせてもらいます。料理もそこで頂きます。牛乳だけで3週間過ごしたこともありました。向こうでは肉は儀礼の時か家畜が死んでしまった時しか食べなくて、基本的に食糧は牛乳なんです。その時はもうとにかく何かを噛みたい！ って思いました。そんな私を見かねたのか、結局3週間経った時にその家の人が家畜を殺し

豊かな大地と厳しい生活の中 で過ごす

て肉を食べさせてくれたんですけどね。あと、彼らは遊牧民で家を移動してしまうため、とある家を探すのにアフリカの大地を一日半歩き続けたこともありました。もちろん周りには野生の動物がたくさんいるわけで、朝起きたらライオンの足跡が近くにあって、なんてことも。これはさすがに恐かったです。それと、もちろんトイレはないので外でします。最近では抵抗なんて全くないですね。



フィールドワークは
楽しいですか？

ほんとうに毎日が楽しいです。どうして楽しいのかはよくわからないんですが、向こうでは、私が日本人でお金を持っているってことが何の意味もなさなくて、彼らに頼らなければいけない状況になるところがあるんです。そこではどうしても

本当の『自分』が現れてくる。彼らはとても親切してくれるんだけど、ずるさや卑しさといった悪い部分はすぐ見透かされてしまう。そして、本当の優しさや強さを見られているという刺激が常にあるんですね。とにかく、人間として何かを試されているような緊張感がいつもあって、それが楽しさにつながってるのかもしれない。

人間の本質が 問われる緊張感

失敗したこと、
辛かったこともあるのでは？

私にはいつも調査を手伝ってくれる戦士の友達がいるんですが、その友達にいい暮らしをしてほしいと思って牛を何頭か買ってあげたんです。でも、その次の日は私に何にも言わずその牛を売り、そのお金で仲間達にお酒を振る舞っちゃった。その時はすごく頭にきて怒ったんですが、今思うと、私は彼の苦勞を分かってあげていなかったんです。私はどんどん溶け込んでいこうとするタイプで、すぐ自分もサンプルだという気分になって、のほほんとしてしまうんですが、他のサンプル達は私のことを決してそうは見えてくれない。彼らにとって私はあくまで白人で、その友達は周りから「いつ

も白人と一緒にいる奴だ」と思われ、実はとても苦勞していたんですね。私にとっては、サンプルの人達と言葉を交わし文化を共有するのはとても気持ちいいことなので、それに気をとられて、いちばん身近にいる友達に苦勞をかけていることに気付けなかった。ほんとうに自分が情けなかったですね。



素晴らしい 友の存

でも、戦士が
友達なんていいですね

そうですね。その戦士の友達とは、もう肉親みたいな感じにお互いに欠点を言い合う仲で、自分はその友達に常に育てられている気がしています。フィールドワークを通じ、こんな友達を持つことはほんとうに嬉しいことです。色々大変なこともあるけれど、この素晴らしい友達とこれからもフィールドワークを続けていきたいですね。